

多元的共生社会におけるコミュニケーションシリーズ

第3回「自分を活かす働き方と暮らし方」

講演：

中野民夫氏（ワークショップ企画プロデューサー、同志社大学政策学部 教授）

塩見直紀氏（半農半X 研究所代表）

ナビゲート：中谷和代（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特認研究員）

トークセッション聞き役：

代田敬子（民間企業人材育成担当、生涯学習開発財団認定ワークショップデザイナー）

中脇健児（特定非営利活動法人ワークショップデザイナー推進機構 理事）

〔日時〕 2013年12月21日（土）15:00-18:00

〔場所〕 大学コンソーシアム京都 キャンパスプラザ京都4階 第2講義室

「多元的共生社会におけるコミュニケーション力」シリーズの第3回目は、京都で開催されました。シリーズの趣旨は、これからの社会を生涯学習社会として位置づけ、その有り様を“コミュニケーション”、“アート”、“学び”の3つの視点からあきらかにしていく試みです。

イントロダクション

第3回目は「自分を活かす働き方と暮らし方」と題して、現在京都を拠点に活動されている中野民夫氏、塩見直紀氏をお招きしました。

多様性と持続可能な社会の実現が謳われる今。従来とは違った考え方や生き方が様々に見受けられるようになってきました。そこでますます重要視されているのが異なる価値観を尊重し合うコミュニケーションの方法やコミュニティのあり方です。今回は、そういった新しい価値を創造・発信されているお二人と共に、これからの社会やコミュニケーションのカタチについて考えました。

なお、今回のシンポジウムでは、次のような構成で進行されました。

PART.1 「半農半X」塩見直紀さんの講演

PART.2 ワorkshop企画プロデューサー中野民夫さんの講演

PART.3 お二人の対談・聞き手を交えたトークセッション

※PART.3 では、会場にいる方々の意見や感想も取り入れながら、今回のテーマをより深めていきました。

PART.1 「半農半 x 研究所」塩見直紀さんの講演

まずは「半農半 x (エックス=天職)」という言葉が使われるようになり約 20 年。今や台湾・中国でも著書が翻訳され、若い世代に新しい生き方を紹介し続けている塩見直紀さんのお話を伺いました。

塩見さんは、まずご自身が住んでおられる京都府綾部市について説明されました。

綾部市の人口は約 3 万 5 千人。進学で高校生が卒業と同時に都会へ出てしまうこともあり、3 年間で約 1000 人というペースで人口が減少しています。これを塩見さんは「進学過疎」と呼んでいます。旧丹波国の綾部はなだらかな里山の地で、冬はすこし雪が降りますが、温暖化のせいか年々降る量が減ってきているように感じているそうです。かわりに猪や鹿が増えてきたとも。また、綾部は合気道の発祥の地でもあり、戦後は「平和都市」「いのりのあるまち」をめざしてきました。「アンネのバラ」の苗木を育てている人もおられ、「平和」に縁のあるまちだと常々思っておられるそうです。

そんな綾部を、塩見さんは「人生探求都市」にしたいとおっしゃっていました。生き方のヒントがいっぱいあり、ビジョンを得たり、未来への元気がもらえるまちにしていきたいそうです。

農作業中も「ポケットには紙と鉛筆を」と心がけている塩見さん。農作業をしていると五感をくすぐられ、エックスへの新しいアイデアが浮かんでくるそうです。「半農半 x」という言葉には、1 時間でも、週末でも、ベランダでもいいので「農ある暮らし」を実践すると、「センス・オブ・ワンダー」が磨かれ、きっとエックスにもよい影響がでますという思いも込められています。

また、塩見さんの住んでおられる村の写真を紹介。棚田が広がり、農道がゆるやかにカーブしている、のどかな里山の風景が写し出されています。この写真を見ながら「人間は今まで直線思考で歩んできましたが、この道のように曲線思考の方が仕事のアイデアも浮かびやすいのかな」と話されました。田舎は何気ない風景のなかに、多くの気づきを与えるヒントを備えていて、ほんとうに自然はすぐれたデザイナーなのでしょう。

では、塩見さんの「半農半 x」に至る道を追ってみましょう。

塩見さんは 1989 年にカタログ通販会社「フェリシモ」に入社されました。その当時から「フェリシモ」は環境問題に取り組む会社であり、環境がテーマの講演やワークショップなどに通われていました。実は、もう一人のゲストである中野民夫さんが企画するワークショップなどにも参加されたことがあるそうです。そして、環境問題に沿って、ご自身のライフスタイルについて考えるようになり、さらに内村鑑三が 33 歳の時に残した「我々は何をこの世に遺して逝こうか。金か、事業か、思想か」という言葉と出会い、ご自身も 33 歳を機に故郷の綾部へ戻られます。「求めているばかりの社会に対して、与える存在になれば、与える時代にできたら」というのが今でも変わらない塩見さんの原点のだそうです。

「半農半 x」は、屋久島在住の作家・翻訳家・星川淳さんのライフスタイル「半農半著」にインスパイアされ、1995 年ころから提唱されるようになりました。塩見さんの「半農半 x」生活はこうして始まったのです。2006 年、台湾にて著書「半農半 x という生き方」が中国語で出版されました。2009 年には中国でも雑誌で 20 ページの特集が生まれ、今夏、中国大陸版「半農半 x」も出版され、いまや日本だけでなく東アジアでその活動が注目されています。

『半農半 x』の根幹には、人としての普遍的な問題が 2 点ある」と塩見さんは指摘します。1 つは「何を食べていくか」ということ、もう 1 つは「どう生きるか」ということです。人は何かを食べないと生きられないし、人には何か「生きる意味」が必要です。ヴィクトール・E・フランクルの「夜と霧」には、どのような極限に置かれても、生きる意味を常に意識していれば人間は耐えることができると述べられています。また、塩見さんは「パンとサーカス」というローマの風刺詩人の言葉を取り上げました。生活をより

高いレベルで保障し、退屈な国民に過剰なまでにサービスを提供し続けるという現在の状況から、クリエイティブな労働とミッション・天職、つまり「自給農とエックス」へ変わることができれば...とおっしゃっていました。

また、「たね（種）」という言葉について、今後の私たちの指針になるような言葉を提示してもらいました。「た」はやまとことばで「たかく、たくさん」という意味があり、翼や風、創造性・ひろがりといった言葉を想像させます。「ね」は「根っこ、根源」という意味があり、こちらは土や持続可能性、安心・安全、生命といったことを表現しています。塩見さんは、「今こそ、個人や家族、組織、さらには国の在り方についても、この「た・ね」の観点から見直してはどうか」と問いかけました。そして、「使命多様性」という独自のキーワードも紹介され、「生命多様」で「使命多様」な世界をめざしていきましょうと提案されました。

最後はさまざまなエックスに関する写真（エクスフォト）を見せていただきました。

著書には、塩見さんの「x」は、市町村レベルから個人までの「ミッションサポート」、つまり「x=天職」を応援することだとして書いてあります。半農半x研究所の代表らしい、xにこだわり続けている塩見さんならではの写真でした。

<※PART1、ここまで>

PART.2 ワークショップ企画プロデューサー中野民夫さんの講演

中野民夫さんは、2001年「ワークショップ」（岩波新書）を出版され、現在ご自身でもワークショップ企画プロデューサーとして市民活動や学校教育、行政や研修など様々な場でワークショップを実施されています。2005年に開催された愛・地球博では「地球市民村」を企画・プロデュースされました。今回は、そんなご自身の近況とご自身にとっての「x」について、お話をしてくださいました。

中野さんは一昨年30年勤めておられた（株）博報堂を退社され、同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科ソーシャルイノベーションコースの教授として活動拠点を京都に移されました。大学では参加型授業を実践し、大人数の授業でもワークショップの手法を使われています。

また、ヨガや勤行など身体を動かすことや音楽、アートにも近年興味を持っており、ご自身が企画されるワークショップでもそうしたワークを取り入れ、アーティストともコラボレーションしておられます。常に「調身・調息・調心」を心がけて日々生活されているそうです。

中野さんの「x」は「ワークショップ企画プロデューサー」。著書「ワークショップ」を出版される際、編集者から「中野さんの肩書きはどう書いたらいいですか？」と尋ねられ、「ワークショップの企画やプロデュースをしています」と答えたのが始まりだったそうです。以来、年間100回以上のワークショップやファシリテーション講座を開催してこられました。中野さんの「x」に至る経緯は、高校3年生の時に遡ります。当時、土曜の午後に明治以降の思想家について皆で調べるといいう授業がありました。当時としては画期的な「みんなで学びあう場」の素晴らしさに感動されたそうです。大学時代は、社会学者の見田宗介さんのゼミでヨガや演劇を取り入れた合宿で刺激を受けたり、西荻窪にあるほびっと村学校に通われたり、途上国を旅したりなど、体験から多くのことを学ばれたそうです。

（株）博報堂に入社後、大阪に配属されますが、その後東京に戻った後に休職し心機一転、カリフォルニア統合学大学院（CIIS）に留学されます。ちょうどその頃、湾岸戦争が勃発し大規模なデモが行われていました。中野さんはカリフォルニアに当時住んでいた日本人と集まり、その状況を取材されました。その中で、「ディープエコロジー」のジョアンナ・メイシー氏と出会い、どうしたら戦争を止めることができるのか尋ねたところ、「集い合い、問い合うことが力です」と言われたそうです。そこから環境と平和の根本にある問題について考え、その問題を乗り越えるためのワークショップを続けてこられました。

「そもそも、自分はみんなで喜びを分かち合うことが好きなんです」「かつて北アルプスの登山で、きつい山を登りきって世界が開けた時のみんなの満ち足りた顔。そういう表情を見るのがとても嬉しかった」と話されている中野さんご自身の笑顔も、とても印象的でした。しかし、一方で中野さんは「ワークショップは、なにかにアプローチするときの1つの手法にすぎない。」と指摘されます。「ともすれば目的になってしまうことがありますね、ワークショップをやっていると、すぐ考えたりするので行動しなくても貢献したかのような錯覚に陥ってしまうことがあります。それは問題です。」みなさんはいかがでしょう？

中野さんは、個人と社会、精神世界と社会運動、自利と利他といった二元性のものを統合していく、その手法としてワークショップやファシリテーションを使って、今も活動されています。

そして、中野さんの最近の研究テーマ「至福の追求とやさしい革命」についてもお話してくださいました。自分の至福（Bliss）を追求することが、やさしい革命につながるということなのですが、一体、至福（Bliss）とは何なのでしょう？中野さんによると、「欲望の充足」ではないし、「幸せ」も個人の主観的なもので違うということなのです。中野さんは「至福」について「身体と心の奥底が歓ぶこと。いのちが滾る（たぎる）こと」ではないかとおっしゃっていました。それは、楽しく楽なことだけではなく、試練や逆境に立

ち向かうことも至福であるということだそうです。そして、一人では幸せになれないので、わがままや自分勝手ということではもちろんないのです。そしてこの考えを実践するには、勇気があります。周囲の目や同調圧力を気にしてしまうからです。「反対されたら、失敗したら。どうしよう……。人のせいにしておいたほうが、楽。」という思うこともあります。「社会を変える（他動詞）」と力むのではなく、一人ひとりの生き方、暮らし方、在り方が変わる、その「自動詞の連鎖」でゆっくり、静かに、少しずつ「社会が変わる（自動詞）」という「やさしい革命」が起これたらと考えておられました。

最後に、やさしい革命の担い手のための5つの修行として以下の項目を挙げられました。

- ・ 身体と心を調える。農につながり正しい食を実践しよう！
— 調身・調息・調心。少しでも田畑、生命の営みに触れる。
- ・ 自然を体験する— 野外で「みんな地球の子どもたち」を思い出そう！
- ・ 異なる他者と「対話」する— 難問山積みの時代、集い合い話し合うことが力！
- ・ 異世界へ「旅」する— 世界は広い。自分の「世界」を相対化しよう！
- ・ アートする— もっと身近に、歌や踊りや音楽を！ 絵や文化を！

この5項目は、簡単なことのようにですが、現代に暮らす私たちにとって実はとても難しいことではないでしょうか。

<※PART2、ここまで>

PART.3 お二人の対談

お二人の講演の後、休憩をはさみ、その間会場内で隣同士や前後で2〜4人のグループを作り、今までの話を聞いて疑問に思うこと、感想などを共有してもらった時間をもちました。さらにそれを付箋紙に書いて、会場前のホワイトボードに貼ってもらいました。お二人の対談の後半は、そうした会場内からのコメントを紹介しながら展開していきました。

塩見さんの言葉で印象深かったことは、世代でリレーをしているという言葉でした。中野さんがカリフォルニアの留学時代に培って日本に持ってきた「ディープエコロジー」「ワークショップ」という概念を塩見さんの世代がつなげ、今の20代、30代の方がさらに大きく発展させているように思うとおっしゃり、その輪の中に会場内の一人一人が加わっている、そしてつながっているという感覚がありました。

また、中野さんはそういった言葉を日本に持ち帰ったときに、たとえば「ディープエコロジー」という言葉を広めるという難しさを感じたとおっしゃっており、言葉にとらわれず、僕らも自然の一部なんだということ、ずっと深く長いエコロジーを考えようという本質的なことを行ってきたという経緯を話されました。

さらに、中野さんは塩見さんの「た・ね」という考え方についても取り上げられました。

「塩見さんは、地に足の付いた方だと思います。地道にやっている印象がある。僕は広告業界にいたから『今のトレンドはなにか』とか『今の先進国はどうか』とか、時代の流れに振り回されていた。大学時代にお世話になった見田宗介という社会学者が、筆名の真木悠介名で書いている著書『気流の鳴る音 - 交響するコミュニケーション』（筑摩書房、1977年）の最終章にも『根を持つことと翼をもつこと』というタイトルの最終章がある。その中に『存在という最もたしかな大地に根を下ろしたとき』という文があって、『存在ってなんだろう?』と思ったことがある。それで、しばらく考えて見田さんに『存在って宇宙のことですか?』と聞いたときに『実はどっちにしようか迷った』といわれて『やった』と思った（笑）若い時は翼があって、いろんなところへ旅に出たり、自分のふるさとや文化を否定したりするんだけど、やっぱり最後は元の場所に戻って両方がほしいと思うんですよね。両方がほしいというのは自然な欲求だと思う。」

また、ワークショップへの取り組みについてや、自分のミッション（=x）を始めることに関しても、参加者とのやりとりがありました。中野さんは、ご自身がこれまで取り組まれてきたワークショップやご自身のxについて、「急いでうまくいった試しがない。若いときは、核や環境問題について、焦ってやっていた。でもそういうものは結局持続せず、燃えつきてしまう。『大事な事は少しずつ、ゆっくり起こるのね。』と一緒に活動していたメンバーに言われて気が付いた。だから、自分が生きている間に成就しなくてもいいと思っている。」と話されました。私たちが今できること、それは宇宙の歴史から見たら1分、1秒のこと。目先のことに囚われ、すぐに結果を求めてしまう今の時代を、私たちはもう一度見直さなければならぬかもしれません。

その後の質疑応答について、以下のような項目がありました。

Q.自分自身の一步を踏み出すにはどうすればいいですか？お二人の生活に近づくためにはどうすればいいですか？

A.塩見さん「はじめの一步が踏み出せない」という人に、“はじめの一步研究所”を作ればどうかという話をしたことがあります（笑）自分が悩んだことが誰かの助けになることがあります。また、一番早く効果的だと思うのは、小さなイベントを自分で主催してみることです。」

中野さん「この頃そういった人にはあまり親切にしないようにしているんです。というのも、学生なんか見ていると結局そんなに強く求めてないんじゃないかな、と思うんです。本気で思ったらやるでしょう。」

茨城のり子の『自分の感受性くらい』という詩がありますよね。『自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ』結局自分がやるしかない、へたれるような志は所詮そんなもの。30年残るものは残るんです。」

Q. 集団圧力にどう負けずにいられるか。

A. 中野さん「2点あります。1つは、自分が真剣だったのに笑われてしまうと落ち込みますよね。でも実際は、相手は全く別のことを思い出して笑ってしまったのかもしれない。周囲にどう思ったか確認すると、自分が勝手に想像していたことと違う真実が出てくることがあります。自分で決め付けず、一人ずつ真意を聞いていくことができれば、過剰にまわりを気にすることはなくなるかもしれません。

もう1つは、私たちは普段人と人の関係性の中で動いていますが、宇宙の中でかけがえのない命だということを忘れがち。中国の老子の思想の中には、人にどういわれても宇宙がついてる、天地のことを思い出そうというものがあります。苦しみや喜びの原因は人と人のヨコの関係の中で起こる。ときにはそれを手放して、タテの関係、宇宙やいのちとのつながりを思い出し、人に言われたことなんて大したことない、と思える自分をもてるとすごくいいと思います。塩見さんも大切にしている「センス・オブ・ワンダー」は、『不思議さや神秘さに目を見張る感性』と訳されていますが、環境意識だけじゃなくて、人生に打たれ強くなる言葉だとも思います。人間関係で疲れたときに、自然の中に入ることは、きっと生きる力にも繋がると思います。」

Q. 無関心な人への語りかけはどうすればいいか。

A. 塩見さん「まず押し付けるだけではいけないと思います。僕は“おのずと広まる”ということと、(この時代を) どう生きるかということベースにした発信を今までやってきました。たとえば、グリーンツーリズムやエコツーリズムなどいろんなツーリズムがあるけど、綾部ならではのツーリズム(天職系ツーリズム)を10年模索して見えてきたことがあります。回り道だったかもしれないけれど、綾部が少しはいい場所になってきたと思っています。」

中野さん「綾部は僕にとってもすごく興味深い場所です。この前行きましたが、何かある気がします。」

Q. 都会で半農をどう実践していけばいいでしょうか？半スポーツ半Xではだめでしょうか？

A. 塩見さん「農は新鮮で安心な食べ物が得られるということよりも脱人間中心主義が重要と思っています。土や植物に触れ、気象の変動などに気付き、生き物がいて、自分が与えられていると感じたとき、人間中心主義を超えていけるのではないかと。農はそういうことを教えてくれやすいと思います。スポーツでもコートやグラウンドに入る前に脱帽する、礼をするなど、見えないものに配慮することがありますね。でも半農は鉢植えで育てることで、屋上菜園などでもOKなんです。少しでも土に触れることからスタートしてもらいたいです。」

中野さん「僕は都会育ちで、スーパーでの野菜の方が自然という子どもだったんです。畑でなっているトマトをそのまま食べるのに抵抗を感じるほどでした。でもある時屋久島で、ラディッシュの種をもらって、そこから土に触れることが始まりました。やっぱり、まいて数日で芽が出てくるとうれしいよね。そして、どこかに少しでも農的な暮らしがあると野菜の匂もわかるし、微生物の働きのすごさとかわかるじゃないですか。生ゴミも焼却にすごく負荷をかけているという話を聞くんだけど、埋めると2〜3週間で土に返っているのを知るとすごいと思う。農的な部分はスポーツとは違うと思います。」

Q. 人と人がつなぐ、人と自然、繋がりをもっと広く持っていく。いくつかのチャンネルをもっていくことが大事なのでしょうか。

A. 塩見さん「そうですね。半農半Xは農本主義・農業中心主義ですかといわれると、それともちがう。農と知の融合、“農知本主義”がめざすところです。日本的なクリエイティブな知恵を生かした文化発展を日

本は担っていかないといけない。中野さんのおっしゃった「翼と根っこ」という方向と半農半 x は、そう違いはないなと思っています。」

Q.最後に、二人の最終目的地はどこを目指している？後継者の育成については？

A.塩見さん「僕は一人ひとりが自分のテーマを研究しながら小さな農をおこなう『半農半 1人 1 研究所国家』を目指していけたらと思っています（笑）みんなが自分の分野を探究して、そこから出てきた知恵をみんなのために生かされたら。特によいものは国家プロジェクトにして育てていく。それを成長戦略に生かす。講演の際、経済発展をどう考えるか、という質問が出てくるのですが、一人ひとりの人生のテーマ、ライフワークを生かした政策はまだできてない気がするので、こう答えるようにしています。」

中野さん「最終的なゴールはまったく考えていません。今ここにいるのも、自然学校の仲間とのつながりで東北のボランティアに行ったときに、隣のテントの人から同志社の公募が出るからどうですかと誘ってくれたことがきっかけなんです。気になることについていけば、おのずと展開するだろうという確信があるので、先のことは考えずに今直面していることを丁寧に、楽しく行うようになれたらと思うようになりました。」

最後はひとりひとり自分の x を見つけるためのミニワークを塩見さんに行ってもらいました。中野さんからはオリジナルの「ガーテースング」を弾き語りで披露していただき、みんなで思い思いに歌って終わるという、とても和やかな締めくくりとなりました。

<※PART3、ここまで>